

家保だより

第 55 号 令和 8 年 2 月発行

福井県家畜保健衛生所

〒918-8226 福井市大畑町 69-10-1
Tel 0776-54-5104 Fax 54-5966
email katikuho@pref.fukui.lg.jp



福井県家保 HP

重要 定期報告の提出

家畜伝染病予防法に基づき、家畜所有者は毎年 2 月 1 日時点の家畜の飼養頭羽数および飼養衛生管理状況等を県知事に報告する義務があります。飼養頭羽数が 1 頭羽から定期報告書の提出が必要です。

様式は、この家保だよりと同封（メールの場合は別添付ファイル）していますので、令和 8 年 3 月 31 日までに家畜保健衛生所あてに、必ず提出（郵送・FAX・メール・eMAFF 等）をお願いします。ご不明な点等ありましたら、家畜保健衛生所までご連絡ください。

対象の家畜	提出期限
牛、水牛、鹿、馬、めん羊、山羊 豚（ミニブタ、マイクロブタを含む）、いのしし 鶏（ウコッケイ、チャボ等を含む）、あひる（アイガモを含む）、 うずら、きじ、だちょう、ほろほろ鳥、七面鳥、エミュー	3 月 31 日

アフリカ豚熱（ASF）の防疫演習を実施

ASF は、平成 30 年 8 月以降、アジア各地で発生している豚の家畜伝染病で、昨年 10 月 21 日に台湾でも発生しました。日本では未発生ですが、日本の国際空港の動物検疫においても、海外から持ち込まれた豚肉製品から ASF ウイルス遺伝子検査陽性事例が認められています。これまで水際防疫での対応が徹底されているところですが、日本への ASF ウイルス侵入が危惧されています。このような状況を踏まえ、ASF ウイルスに感染した野生いのししが山中で発見されたことを想定し、ウイルスの拡散を防ぐための対応について防疫演習を実施しました。訓練では死亡いのししに見立てた砂袋を使用しました。



納体袋への死亡いのしし収納方法



納体袋の運搬方法

高病原性鳥インフルエンザに十分な予防対策を

高病原性鳥インフルエンザの発生が全国各地で相次いでおり、今シーズンは、これまでに12道府県17事例発生し、約412万羽が殺処分の対象となっています（R8年1月22日現在）。引き続き、毎月の自己点検と対策を行い、飼養衛生管理基準の遵守徹底をお願いします。

疾病発生防止のためには

外界には、鳥インフルエンザウイルスなど、多くの病原体が存在しています。畜舎内に持ち込まれる病原体の数を可能な限り減らすことができれば、病気の発生を防ぐことができます。そのためには、下記1~3の対策が特に重要です。

- 1 管理者・農場作業者の衣類・長靴の交換、手指消毒
- 2 野鳥・野生動物の侵入・誘引防止
- 3 飼料・飲水の汚染防止

図1（右）は、1つの対策を講じると病原体数が1/10ずつになることを示しています。複数の対策を講じることで、畜舎内に侵入するウイルスの数を可能な限り減らしましょう。

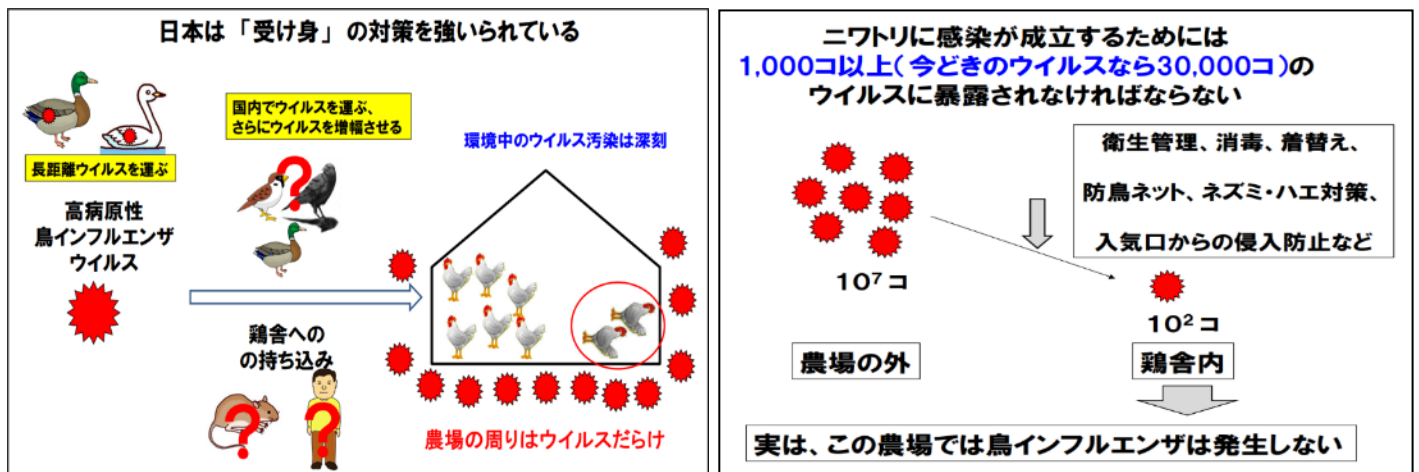


図1. 鳥インフルエンザウイルスの侵入を減らして発生を防止（北海道大学 迫田教授提供）

前述1~3の対策のうち、2についての具体的な方法を紹介します。

野鳥・野生動物の侵入・誘引防止のための具体的な対策

1. 物理的防除

畜舎

鳥類の侵入を防止するため、畜舎の出入り口や窓、使用していない換気扇には2cm角以下の防鳥ネットや金網を張りましょう。ピンと張るよりも、図2のようにゆったりと張ったほうが破れにくいです。

ネズミの多くは畜舎の中に留まらず、出入りをしています。子ネズミは1.5cm（大人の指が第2関節まで入る）以上の穴から、大人のネズミは2.5cm（500円玉大）以上の穴から侵入可能といわれています。穴を見つけたら、ステンレスたわしや亀甲金網を丸めて詰める、隙間には板を入れるなどして、早急に対処しましょう。



図2. ゆったり張った防鳥ネット

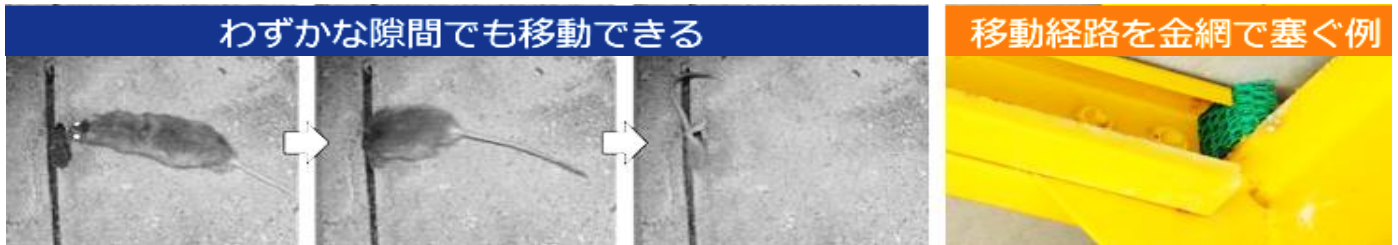


図3. ネズミの侵入経路と対策

農場外縁部

侵入防止柵を設置します。土に設置した場合、柵の下を掘って侵入されることがあるので、地面に埋め込んだり、補強するなどの工夫が必要です。



図4. 侵入防止柵の注意点と対処法

2. 衛生管理区域内の環境管理

隠れ場所・餌を無くす

畜舎周囲は定期的に草刈りをして、野生動物の隠れ場所を無くしましょう。また、野生動物の餌となるものを野外に仮置きしたり、放置したりしないようにしましょう。

消石灰による忌避

畜舎周囲や農場外縁部に消石灰を撒きましょう。散布適量は、20～30m²あたり20kgです。消石灰には、消毒効果のほかに、ネズミなどの野生動物を遠ざける効果も期待できます。ただし、雨に3回以上濡れる、3週間以上放置などで消毒効果が下がるため、定期的に消石灰を追加散布しましょう。



図5. 畜舎周囲の草刈り、消石灰散布

(参考：農林水産省 HP)

冬季の下痢・呼吸器病の予防と対策

冬季は牛の下痢、呼吸器病が発生しやすくなります。発生すると子牛の発育不良や泌乳牛で乳量を減少させ、経済的損失を引き起こすため、予防対策を強化しましょう。

◇ 原因

ウイルス	子牛	成牛
牛コロナ	乳白色～黄色の水様下痢、発熱 鼻汁漏出、発咳	淡褐色～暗緑色の水様下痢、血便 産乳量低下、発熱、鼻汁漏出、発咳
牛ロタ	激しい水様下痢 黄色、淡黄緑色、乳黄色下痢便	泥状～水様下痢、泌乳量減少
牛RS	5～6日間の稽留熱、湿性の発咳、膿性鼻汁、皮下気腫	



冬は①寒冷によるストレス②病原体が不活化されにくい③病原体が伝播しやすい畜舎環境によって下痢、呼吸器病が発生しやすくなります。子牛は消化管や免疫機能が未熟なため、特に注意が必要です。

◇ 対策

① 子牛の衛生管理

カーフジャケットやネックウォーマー、保温用ヒーターなど子牛の体温を保つ努力を。こまめな敷料交換で乾燥した寝床を保ちましょう。移行抗体による感染防御のため初乳の確実な給与を。呼吸器病対策に換気も行いましょう。

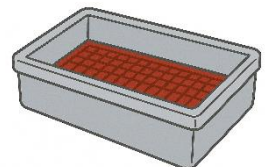


② ワクチンによる免疫強化

使用条件に留意しつつ、必要に応じて検討しましょう。

③ 病原体の侵入&拡散防止

車両消毒、石灰帯を設置しましょう。踏み込み消毒槽による靴底消毒を徹底しましょう。また、下痢が発生した場合には、洗浄、消毒、発症牛の隔離や世話の順番を最後にするなど、感染が広がらないようにしましょう。



発見が遅れると、重症化し死亡する場合があります。異常を見つけたらすぐに診療獣医師または家畜保健衛生所にご相談ください。

ワクモが鶏舎内で見られる前から対策を始めましょう

ワクモとは

主に鳥類を吸血する体長1mm程度のダニの仲間。鶏は貧血や衰弱、重度の場合、死亡することがある。吸血以外にも、鶏痘などの病原体を運ぶ、産卵率の低下、軟卵や排泄物による汚卵など生産物にも被害が及ぶ。鶏舎内の作業者は不快感があり、アレルギー症状が出ることもある。

雌の成ダニは吸血後に4~7個産卵し、約3か月の生存期間中に吸血と産卵を8回繰り返します。卵が孵化して、成ダニになるまでの約1週間の成長段階（第1および第2若ダニ）にも吸血が行われます。ワクモが増えるには最適な室温（15℃~25℃）と湿度（70~90%）があり、条件がそろえば一気に増え、ひと月で1,800倍に膨れ上がることがあります。盛夏時や極寒期にはぐっと数が減りますが、隙間にダニや卵が残っています

ワクモは夜間に吸血して、日中はあらゆる隙間に隠れる習性があります。日中に鶏舎内や鶏の体にワクモが見られるということは、隠れる隙間もないほど増えている証拠といえます。日中に見られるワクモは氷山の一角で、駆除作業は大変な労力が必要となります。ワクモ対策は、まだ発生していないと感じている時点から始めることをお勧めします



1 減らす

オールアウト後、間を開けずに殺虫剤を散布する

ホコリ、ケージの隙間等に固まって潜んでいるワクモを、清掃時に鶏舎内に広げない

清掃時は可能な限り、機材などは分解して清掃する

機材の隙間に潜むワクモを露出する

高濃度の界面活性剤を含む台所用洗剤の泡で洗浄する

ワクモ体表の油分が分解され、泡を吸い込み窒息する。泡で放置後、十分水洗する

60℃程度の高温水で洗浄する

65℃で成ワクモは即死、60℃でもほぼ瀕死状態となる
水量確保が難しい場合、仕上げに使用する



十分に乾燥する

ワクモが増殖しやすい湿度環境を作らない

導入前に再度効果がある殺虫剤を散布する

吸血できていない空腹のワクモは、殺虫剤が効きやすい



2 増やさない

- ワクモが生息しそうな場所に環境散布可能な薬剤や対策資材を使用する
- 鶏舎内や周辺の整理整頓を行い、ワクモの隠れる場所を減らす
- ワクモが増えた際には、飼料、飲料水や鶏卵への残留に注意して薬剤等で駆除する
- 鶏糞は住処になるため、ワクモ対策としてこまめに除糞することが望ましい

薬剤には、休薬期間（薬剤使用後の鶏や卵の出荷停止期間）や生産物への農薬残留基準があります。使用の際には用法・用量を守りましょう。また、使用した薬剤について記録（薬剤名、使用日、使用量、使用場所）し、有効なワクモ対策につなげましょう。

殺虫剤 神経の興奮状態を持続し、死に至らしめる

*ワクモ卵には効果なし

*作用機序が異なる薬剤をローテーションして使用することで、薬剤抵抗性の出現を抑えることが可能

分類（有効成分名）	作用機序	使用対象
カーバメイト系（カルバリル等） 有機リン（トリクロロホン）	アセチルコリンエステラーゼ阻害	虫体に直接、生息場所 もしくは両方（商品で異なる）
除虫菊系（ペルメトリン）	ナトリウムチャンネル妨害	虫体に直接
マクロライド系（スピノシン A、D）	ニコチン受容体活性化 GABA 受容体阻害	生息場所
イソキサゾリン系（フルララネル）	GABA 受容体阻害	鶏に飲水投与

昆虫成長制御剤（IGR 剤） 脱皮や孵化を阻止して増殖を抑える

*成虫は殺虫できないため、効果がみられるまで時間を要する

- エトキサゾール → 生息場所に使用

対策資材

- シリカや珪藻土（市販）
ワクモの体を傷つけて体内の水分を奪い、脱水状態にして死に至らしめる
- ハーブ系ワクモ対策混合飼料（A 飼料）
ハーブの香りでワクモが好む鶏臭が目立たなくなり、吸血するワクモの数が減る。産卵には吸血が必要なことから、絶対数の減少につながる
- 捕虫資材（市販あり）
ワクモが隙間に隠れる習性を利用し捕虫する。裁断した段ボール紙を活用する方法あり

3 持ち込ませない

- ワクモが寄生していない鶏群を導入し、使用した籠などに付いたワクモを殺虫する
- 鶏舎への野生動物侵入防止や衛生害虫発生を予防・駆除する
- 鶏舎間で持ち込まないため、衣服・長靴の交換や器具の洗浄を行う

日和見感染症

日和見感染症（ひよりみかんせんしょう）は、免疫力が低下しているときに発生しやすい感染症です。健康な状態では、免疫システムがウイルスや細菌などの病原体から身体を守っています。しかし、何らかの原因によって免疫機能が弱まると、普段は問題にならない微生物が病気を引き起こすことがあります。これが「日和見感染」です。「日和見」という言葉は、機会を狙うという意味を持ち、病原体が免疫力の低下を機に感染を引き起こす状況をあらわしています。

多くの動物種に対して多様な化膿性日和見感染症を引き起こす病原体として、トウルエペレラ・ピオゲネスがあります。環境中に存在する菌で、例えば乳牛では乳頭損傷後に搾乳中の乳房に感染することがあります。県内一酪農場において、トウルエペレラ・ピオゲネスによる乳房炎が連続しましたのでお知らせいたします。

症例1：乳牛 元気消失、乳房炎（クレブシエラ、大腸菌）発症 → 予後不良、淘汰

解剖・細菌培養の結果、全4分房と乳房リンパ節から大腸菌、3分房と乳房リンパ節から大量のトウルエペレラ・ピオゲネスを検出しました。

症例2：乳牛 血乳 → 予後不良、淘汰

解剖・細菌培養の結果、全4分房と乳房リンパ節から大量のトウルエペレラ・ピオゲネス、乳汁からレンサ球菌を検出しました。

上記の2例に代表されるように、乳頭の傷に他の菌が先に感染して乳腺組織がダメージを負っていると、トウルエペレラ・ピオゲネスが増殖しやすい環境になってしまうこともあります。最初の感染を防ぐために、衛生的で怪我をしない飼養環境づくりを心がけましょう。

今年の干支 「午（馬）」のお話

みなさんもお存じのとおり、今年の干支は「午（馬・うま）」ですが、日本には古くから残っている、固有の「在来馬」がいます。かつて、人や物資の運搬や農耕、軍馬、あるいは神馬として地域の気候風土に溶け込み、日本人の生活に根付いていましたが、現存するのは「北海道和種」や「木曾馬」、「御崎馬」など全国で8種とされています。サラブレッドといった洋種馬よりも一回りも二回りも小柄ですが、体は丈夫です。在来馬は地域文化を伝える貴重な存在でもあり、保存会により種の保存に取り組まれています。家畜伝染病に関しては、平成23年に宮崎県の御崎馬の群れで馬伝染性貧血ウイルスの感染が認められ、感染馬が淘汰されました。その後、各都道府県の畜産関係団体等が在来馬、延べ約1000頭の検査を3年間にわたって実施し、平成29年には国内清浄化が確認されました。今後も伝染病に脅かされずに、在来馬が保存されてほしいものです。



牛のヨーネ病の検査方法の変更について

牛のヨーネ病はヨーネ菌に感染後、数ヶ月から数年の長い潜伏期間を経て、分娩のストレスなどを機に発症します。感染牛は潜伏期間でも糞便中にヨーネ菌を排菌し、他の飼養牛への感染源となるため、早期に摘発し淘汰する必要があります。

これまで、スクリーニング検査は抗体検査のみで実施していましたが、「家畜伝染病予防法施行規則」の改正により、遺伝子検査が追加されました。

24 か月齢未満の感染牛では抗体が十分に上昇していないため、抗体検査では摘発できない場合があります。一方で、遺伝子検査では糞便中のヨーネ菌の遺伝子を検出することにより、抗体が上昇する前の感染牛を摘発することができます。

本県においても、令和8年4月以降、「県外導入牛の着地検査」および「奥越高原牧場の買取り子牛に関する検査」を中心に、従来の抗体検査から遺伝子検査に移行する予定です。それに伴い「奥越高原牧場の買取り子牛に関する検査」の検査対象が母牛から子牛に変更となります。ヨーネ病の5年に一度の5条検査は従来通り採血し抗体検査を行います。

遺伝子検査を実施する際は糞便（直腸便）を採取します。ヨーネ病検査手数料（200円／頭）の変更はありません。

	変更前	変更後
着地検査	抗体検査 （血液）	遺伝子検査 （糞便）
奥牧買取り子牛に関する検査	抗体検査 （母牛の血液）	遺伝子検査 （子牛の糞便）

県内における主な家畜伝染性疾病の発生状況

畜種	病名	発生戸数	発生頭羽数 [※]
乳用牛	牛伝染性リンパ腫	1	1
	ピロプラズマ病	2	2
	牛ロタウイルス病	1	1
肉用牛	牛カストリジウム・パ-フィンゲ-ン感染症	1	1
	サルモネラ症	1	1
めん山羊	消化管内線虫症	2	3
	肝蛭症	1	3

（令和7年10月1日～令和7年12月31日）

※病性鑑定を実施した頭羽数